

「能登半島地震が教えてくれた」

第11組 廣専寺 近藤 龍磨

2024年、第2期の2年目が、7月1日から新たなセンター活動が始まります。これまで、「開顕・育成・研修」の三部会体制にて、教区の趣旨に沿いながら、風通しの良いセンター活動を目指してきました。

ここにきてようやく、2020年発足当初に掲げました

「集める教化」から「出向く教化」への取り組みが、コロナ禍を経て始まろうとしていますし、それに向けての話し合いが教務所サイド・センタースタッフの意見、助言を聞きながら始まっております。どの様に展開していくか、具体化がされましたら、皆様にお知らせし、ご意見を聞く所存でございます。よろしくお願い申し上げます。

また、出向く教化の一環として、今年正月に起こりました能登半島地震において、被災された御寺院、御門徒をはじめ一般の方々のお手伝いとして、教化センターを中心に、3月より毎月、能登へ出向きボランティア活動を始めております。

この活動の2つの課題が、5月の活動を終えた時点で見えてきました。

1つは、メディアが盛んに報道している「復興」ということの表現の甘さ、特に今でも震災当初と何ら変わらない風景を見るにつけそう思います。今は、「復興」ではなく「復旧」なのです。

それを受けて、2つ目は真宗教化で最も大事な傾聴（ただ聴く）という姿勢をもって、被災された人たちの「心の復旧」と、風景を元に戻していく為のお手伝いをしていきたいと願っています。

息の長いお手伝いが継続していく為に、ボランティアスタッフを教区の皆様に呼びかけております。ご協力のほどよろしく願いいたします。

「たすけて」

と今、手を出している能登の方々は、1975年に始まった、能登原発に対して老若男女、子供たちも、真宗僧侶、御門徒が28年間、身体を張って

「原発はいらない」

という闘いを続けてこられました。

この間に、原発推進派との争いや、電力会社のこれでもかという多額の原発マネーによってもたらされた、原発賛成、反対による家庭内問題等々、人間関係がバラバラになり地域が分断されていったと、この闘いの先頭になった真宗僧侶、塚本氏は報道番組で語っておられました。その塚本住職を支えた言葉に

「強い者の味方をしたら坊主じゃない」

という父の言葉があった。そしてそれは

「絶対に推進派の個人攻撃だけはするな」

という塚本氏自身の言葉に繋がった。

怒り、苦しみ、悲しみに涙しつつも、南無阿弥陀仏の筵旗のもと、念仏を称えつつ座り込みを続けた真宗門徒がおられたことを、次の世代に誇りをもって語っていかうと思っております。

今、センターで継続しておりますこの能登ボランティアは、この国土・故郷を誠実に護ろうとした人々の手を、ただ握り返すという活動であります。教区内、またこのテレフォン法話をお聞きの皆様、重ねてご協力よろしく願い申し上げます。

げます。